

コミュニケーションツールとなる作陶方法の開発と活用

担当：齋藤敏寿 文：齋藤敏寿



器のかたちが完成する瞬間を喜ぶ参加者

東日本大震災と福島第一原発事故により避難を余儀なくされ、様々な背景を持ってつくば市で生活している方々とつくば市民を対象に、緩やかなつながりを育むために「結の器プロジェクト」を企画した。

1. コミュニケーションツールとなる作陶ワークショップの開発と運営

2. 完成した陶器(杯と碗)を使用して、参加者と協同運営する食事会イベントの開催

活動の概要

目的：

- ・継続的な活動となる為の手法を構築する。
 - ・コミュニケーションツールとしての作陶方法を創造する。
- 結の器プロジェクトは、作陶を通し緩やかなつながりを育むための活動を目的とした。

対象：

福島県、宮城県、岩手県から避難を余儀なくされ様々な背景を持って、つくば市で生活している方々とつくば市民を対象とした。

方法：

- ・出身地の異なる2人が(例：双葉町と南相馬市)チームとなり型成形を使用して、杯と碗を協力して作成した。
- ・ワークショップ参加者以外の方々も招待して、完成した器を使って食事会を開催した。

結果：

作陶過程を協力して行うことにより、緩やかなコミュニ

ケーションが構築された。土(粘土)から成型方法、装飾、焼成、完成までの作陶過程すべてに係ることで、作陶に対する理解が深まり、完成した器への愛着が深まった。器を使用した食事会や自主的な会合に使用され(杯を使用した飲み会など)、陶器を通じ、参加者以外の人と人の繋がりも育まれた。

1. はじめに

つくば市には、東日本大震災、福島第一原発事故の影響で福島県、岩手県、宮城県から、209世帯、508名の方々が避難を余儀なくされ生活をされている(2013年9月時点)。2012年のCRプロジェクトで繋がりがあったつくば市並木地区で生活をしている方々を手掛かりに今年度の活動を計画した。昨年から継続活動する教員や学生がいない状態であったので、昨年チームの『結』というキーワードを継承することを指針に、作陶を活動の中心としメンバーを募った。学生構成は芸術3名、社会工学5名、生物資源1名となっ

た。また単位修得とは関係なく有志2名の学生(芸術、情報メディア創生)が参加した。

2. 活動内容、経緯

●視点構築演習1～4回

チームの活動方針、内容、課題を検討した結果、(ゆっくり)つながる・広がる・(ながく)つづく『未来へ』をチーム指針とした。



ミーティング風景

『結』をキーワードに以下の課題を設定し、学生と共に活動内容を検討した。

問題解決：

やきものを媒介として結となるには？

1回のイベントで終わらない結とするためには？

情報発信：

繋ぐ為のシステムとは？

伝えるためには？

評価：

実施した成果をどう評価するか？

結果を検証し、評価するためには？

●視点構築演習5～10回

作陶を活用した『結』となる運営方法の開発と繋がりを育む活動を企画することが決定し、型成形という技法を使用して、杯と碗を作成することが決定された。作陶方法(型成形)の説明とサンプル制作を行い、WS実施へ向けて問題点、課題などをまとめた。

・杯…酒を酌み交わすことで絆を深める。

・碗…同じ釜の飯を食べる＝人間関係を強くする。



WS実施に向けて型成形の実習と運営方法の検討

●5月24日中間報告会において活動方針の発表

発表に対して以下のコメント等があった。

・昨年との繋がりを意識できていない

・被災者の方々の声をもっと聞くべき

・継続的に活動を行うにはどうするのか

中間報告会で更なる課題が示されたことで、チームとして課題の再検討、問題点を把握すると同時に、背景の確認と現地へリサーチを行うことの必要性から、6月14日(金)に双葉町から避難をされ、つくば市並木地区で生活されている中村希雄さんと西内重夫さんにWS案の説明を行い、つくば市での生活、避難生活の現状をお聞きした。リサーチの結果、双葉町の方々には生活学級があり、つくばでの生活を前向きにとらえていて、出身地に対する意識が強く、被災者として提供されるだけの支援には抵抗があることがわかった。作陶に対する期待と、「是非やってみたい」との意見をいただき、企画に対する方向性が確認されたと同時に新たな問題点と課題が見つかった。



6月14日つくば市並木リサーチの様子

●新たな問題点と解決方法の検討

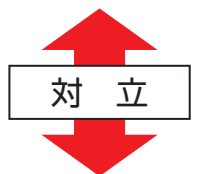
・支援する側としてすべてを提供することは創造的復興支援なのか？

⇒双葉町の方々に協力をあおいで、共につくり上げるWSにする。

・双葉町の方々と作り上げたイベントでは、ほかの町の方々が参加しづらいのでは？

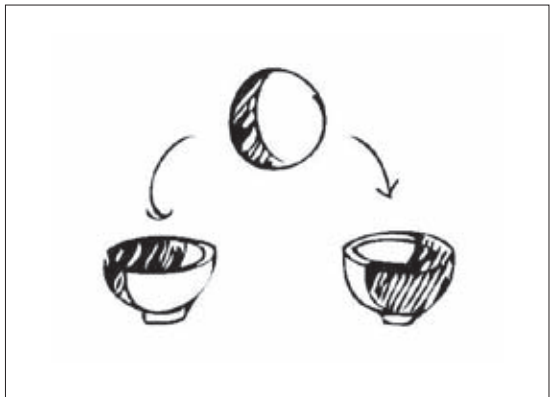
⇒出身地に関係なく、つくば市に避難されている全員を対象とする。

双葉町の方々と協力して行うWS



避難してきた方全員が参加しやすいWS

●コミュニケーションツールとしての作陶方法を創造する
⇒第三者(学生)としてできることは、避難されている方々のつながりの場を作ること。
⇒学生がイベントを企画することで出身地などに関係なく誰でも参加しやすいWSを開催できるのでは
⇒単なる陶芸教室ではなく、“つながりをつくる”WSの開催
⇒完成した器で食事をすることも提案
話し合いの結果を持って第2回リサーチ(7月10日)へ並木(双葉町生活学級)に方針を説明し意見を聞き、協力を依頼した。



結の器コンセプト：球から2つの器へ繋がるかたち

3. リサーチ

チームとして、現場ヘリサーチした日程は以下に示す通りだが、教員、学生個々に原発事故のその後、双葉町、南相馬市、浪江町、大熊町の復興計画や歴史文化、相馬焼の現状、浜通り地区の現状などをリサーチし、情報共有を行った。またつくば市に避難されている方々すべてに今回のプロジェクトを告知する目的と個人情報保護の観点から、つくば市総務課に広報などの協力を依頼した。
6月14日、7月10日 つくば市並木地区
対象：双葉町(生活学級)
7月25日、7月29日、8月25日 つくば市役所
対象：つくば市役所総務課

4. ミーティング

チーム全体ミーティングの他に広報班、WS準備実行班、食事班に別れて実施体制の検討と準備をした。SNSの活用としてFacebookに結チーム専用ページを作成し、各班の進行具合、会議に出席できない学生への情報共有を心掛けた。演習の授業が終了してから、学生のスケジュールを把握することの難しさが露見し、計画を遂行すること、全体ミーティング日の設定など調整に苦心した。また一部の学生に仕事が偏るという事態も起こった。演習という授業形態の影響もあるが、個々の責任、仕事の配分、チーム間でのコミュニケーション方法等の課題が今後に残った。
●広報班(榎本、海老原、宮尾、岡本)
・ポスター、チラシ制作
・避難されている方への資料郵送をつくば市役所へ依頼
⇒つくば市に避難されている方全員へ通知
(個人情報保護法に配慮)
・参加希望者への対応

- ・参加者への通知、連絡
- ・竈チームへ食事会での食材提供などの連携打診



結の器プロジェクトチラシ



展覧会ポスター

- WS準備実行班(小池、立場、佐藤、水内、森田)
- ・ワークショップ作業での使用物品、材料の検討と調達
- ・ワークショップ当日の作業工程及び説明方法の検討、説明用マニュアルづくり
- ・器のサンプルづくり



ワークショップで使用した作業説明書の一部

- 食事班(銭谷、笹岡)
- ・食事会の会場検討(つくば市の公民館など)
- ・食事会の献立検討(竈プロジェクトチームとの連携)
- ・双葉町(生活学級)との協力依頼と実施体制の構築

5. 実施

WS実施日は以下に示す通りだが、広報班のチラシ、ポスター制作、ポスター掲示からチラシの郵送、参加者への連絡調整、アンケート作成、WS準備実行班の粘土の調達から釉薬の選定、道具の調達、説明のためのマニュアル制作、サンプルの焼成など、多くの時間をかけて事前準備を行った。ワークショップを成功させる為に事前準備がいかに大切か、準備に携わった学生は多くを学んだことであろう。食事会では参加者と協同で調理し、竈プロジェクトチームとの連携を行い、北条米の提供によるおにぎり作り、チーム間の活動を共有した。

ワークショップ実施日程

- 9月01日(日) 9:00~15:00 原型作り、型作り
- 9月08日(日) 9:00~15:00 はり込み(成形)
- 9月22日(日)13:00~15:00 釉薬付け、窯詰め
- 9月28日(土)11:00~14:00 窯出し、食事会

- 結の器プロジェクト参加人数 総計：51名
- 出身地：双葉町、楡葉町、富岡町、南相馬市、いわき市、つくば市



自己紹介と趣旨説明



熱心に説明を聞く参加者



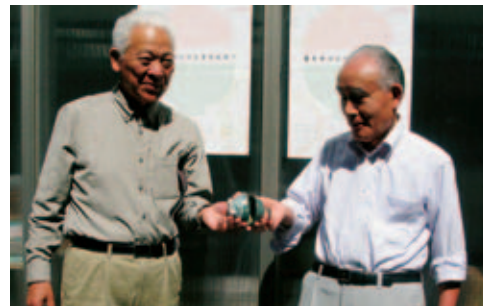
出身地の異なる2人で協力して原型作り



2人して協力して作業中



釉薬付け作業(希望者が参加)



2つの杯が繋がる、結の器



窯だし風景



参加者と学生による食事会の準備



食事会風景

●『結の器プロジェクト』成果展2013年11月9日(日)～22日(金)

会場：筑波大学6A棟エントランスギャラリー

来場者数82名(芳名者数)

プロジェクトが終了して、成果を公開する観点から展覧会を企画した。

完成した作品の展示、チーム結成からWS実行までのタイムラインを展示の軸とし、ミーティング内容から学生の活動、WSでの写真、今後の課題等を提示したパネルを使用し展示した。WS参加者、つくば市役所の方、他専攻の学生などに展覧会を鑑賞してもらえ、プロジェクトの内容を公開する目的が果たせた。



展示会場

6. 評価

当初の目的、計画を遂行できた点と、プロジェクトを行ったことによる新たな課題が露見した点などをどの様に評価するかが、今後の大きな課題である。

今回のプロジェクトの評価は以下があげられる。

- ・出身地の異なる方々に参加してもらうことができた。
- ・つくば市に避難されてきた方すべてに、今回のようなイベントがあることを知らせることができた。
- ・他のチームと連携することができた。
- ・WS、食事会以外での参加者の自主的な交流があった。

7. 今後の展望と課題

今後の展望としてプロジェクトに参加して下さった方々に企画の段階から携わってもらい学生と一緒に運営をすることを提案する。アンケートでは7名の方から企画から参加してみたいとの回答を得ている。評価の点で指摘した、新たな課題として積極的に参加される方々の背後にもまだまだ多くの復興への問題と課題が見え隠れする。精神的な回復や、参加したくても遠慮や気後れする方が多くいること。地区間の障壁、終わらない原発事故への不安、仮設住宅での生活期限(公務員宿舎などの退去期限勧告)など、明るく接して下さる姿にふと感じられる様々な不安の言葉が、話を伺う度に、まだまだ何も解決できていない、果てしない問題と課題が想像できる。

今回の結チームとしてまとめた今後の展望と課題は以下である。

- ・今回のWSが単発的なものにならないために

⇒今回のシステムの展開

(初対面の方と共同でつながりのある器をつくる)

プラン1 今回参加した方々と一緒に福島県いわき市などでイベントを開く。

プラン2 別の土地で初めてあった人と制作を行う。

- ・今後、器づくりを通してどの様なつながりをつくるのか

⇒つくったものを人にプレゼントして新たな広がりをつくる

プラン3 器を招待状にして食事会を企画する。

8. おわりに

結の器プロジェクトは、単発的なワークショップで完結しない活動を目指しているが、授業運営として課題もたくさん残る。演習授業の形態、年度で替わる学生、課題の引き継ぎ。

プロジェクトを行うことで見えてくる果てしない復興への道のりと様々な問題と課題の想像があげられる。プロジェクトを行った結果、教員、学生を感じる本当に創造的復興支援と成り得たのかという自問、今回のプロジェクトで解ったことは、創造的復興支援とは簡単なことではなく果てしないということであり、無力さとともに、想像できる様々な問題と課題に対する解決が求められる。その為に小さな事の一つ一つ誠意をもって対処していく事しかないということである。

今回のプロジェクトで筆者が印象に残った象徴的な2件の出来事をおわりに示して次年度への課題としたい。

- 今回のプロジェクトに参加希望をされていた方が、当日に参加できなくなり連絡をいただいた内容
「つくば市に避難してはじめて、今回のプロジェクトに参加したいと思いました。震災後から精神的な病と闘っており、当日にキャンセルしてしまいました。申し訳ありません。皆さん活動頑張ってください。今回の連絡ありがとうございます。来年は参加したいです。」
- プロジェクトに参加された方から結チームのメールにその後の報告を連絡して下さった内容
「出来上がった作品を持ち帰ることが出来、当日の夕方に反省会(直会)を行い早速、珍製品の器(杯)を使いお酒で乾杯しました。(8名参加)…」

芸術3年小池美佳子、海老原梓、榎本ちひろ

社会工学4年立場かおる、宮尾采佳、岡本ゆきえ、佐藤桃、3年水内勇輝

生物資源2年銭谷菜々未

有志：大学院芸術2年笹岡るり、情報メディア創生3年森田涼TA 大学院芸術1年阿部潤、村井隆宏



プロジェクトメンバー

学生の感想



榎本ちひろ

芸術3年

リサーチの中で出た、被災者間の支援のされ方の違いへの気まずさや負い目に対して、第三者としてそこへ介入できたのはとてもよかったと思います。また、今回はお米の提供と、食事会のための手助けという簡単な形でしたが、CRプロジェクトの別チームとの活動に接点ができたことは、今後のCRプロジェクトにとって新たな活動の展開を考えるきっかけとなったのではないかと思います。継続的な活動として具体的に提案するまでに至らず、まだまだ問題は残っていますが、今回の活動は概ね良いものになったのではと感じています。



小池美佳子

芸術3年

ワークショップや前段階の調査で実際に被災者の方と触れて感じたのが、そのエネルギーや積極性です。ワークショップの場ではそのエネルギーに圧倒され、また積極的に協力して下さって逆に助けられるという場面もありました。しかし元気な姿の一方で被災者の方は自分には踏み込めないような複雑な問題や不安を抱えていることもその言葉を聞いて知りました。様々な事実や問題を知っていくほどに自分たちのチームはどのように進んでいくべきなのか悩むことの多かった今年度の活動ですが、ここで得た経験が来年度やその先に繋がっていったほしいと思います。



立場かおる

社会工学4年

震災による被害をほぼ受けることがなかった私は、今回のCRを通して被災者の方々と触れ合い、初めて震災を身近に感じたように思います。そして考えさせられたのは、いつまでも被災された方々を“被災者”としてくくってしまっていて良いのかということです。もちろん、現在でも辛い生活を強いられている方もたくさんいらっしゃると思います。しかし、私たちがお会いした方々は少なからず、新しいつくばでの生活を楽しまれているという印象を受けました。線引きは難しいかも知れませんが、今回私たちがリサーチを行ったように被災された方々の声をしっかりと聴き、その方々の考え、想いを受け止めるということが非常に重要だと感じました。

参加者との集合写真